

全学共通教育の平成22年度実施に 向けた研修会 (FD) 報告

大学教育開発センター調査研究部編

第1部「全般的課題」では、全学共通教育の全般的課題と大学教育開発センターの次年度の取り組みについての報告、あわせて、現在行われている全学的なFDプログラムについての紹介をおこなった。続く第2部「分科会」では、授業担当者を中心に四つの分科会に分かれて、より具体的な討論と情報交換をおこなった。また分科会終了後には、全学的なFD研修会の周知をはかるべく、SPODで行われているスキルアップ講座のビデオを放映した。

日時：平成21年12月15日（火）13：30～17：00

場所：教育学部621講義室ほか

対象：全教員（特に、平成22年度全学共通教育担当予定の先生方）

第1部 全般的課題

1. 全学共通教育の現状と課題
2. 次年度の新しい取組－『四国学』の設置に向けて
3. 全学的なFDプログラムについて
4. 全学共通教育事務手続

第2部 分科会

- A. 大人数講義授業改善分科会（主題科目・共通科目等）：授業実践例の紹介と討論
 - B. 少人数講義授業改善分科会（教養ゼミナール等）：授業実践例の紹介と討論
 - C. 成績評価の厳格化・標準化分科会：各学部の現状紹介と意見交換
 - D. 今後のFDのあり方を考える分科会：情報交換と意見交換
- ※ 分科会終了後、17：00から四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）で行われているスキルアップ講座の様子をビデオ放映

以下、当日の提題者と書記が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育開発センター調査研究部が編集をおこなった。

【大学教育開発センター調査研究部】柳澤良明（調査研究部長・教育学部）、倉石文雄（教育学部）、中島洋樹（法学部）、宮脇秀貴（経済学部）、新井明治（医学部）、吉田秀典（工学部）、深田和宏（農学部）、羽白洋（大学教育開発センター）、葛城浩一（大学教育開発センター）、佐藤慶太（大学教育開発センター）、細谷謙次（修学支援グループ）

【その他の執筆者・資料提供】武重雅文（大学教育開発センター長・教育学部）、田中健二（共通教育部長・教育学部）、堤英敬（法学部）、瀬戸郁子（教育学部）

FD研修会報告 第1部・全般的課題

司会：葛城浩一（大学教育開発センター）、記録：佐藤慶太（大学教育開発センター）

1. 全学共通教育の現状と課題

田中健二（大学教育開発センター共通教育部長）

まず、平成16年度以降の全学共通教育の取り組みを概観し、次いで今後の課題について述べる。

平成16年度の国立大学法人化にあっては、中期目標に「学生中心の大学にふさわしいカリキュラムの実施」を掲げ、中期計画では「4年（6年）一貫した学士課程教育を実現するため、専門教育と有機的に連携する教養教育カリキュラムを作成する」ことを計画の中心に据えた。これに応じて平成17年9月16日の教育研究評議会で「全学共通教育の再編成」を決定した。その主な内容は以下の通り。

- 1) 主題科目を従来の4主題から6主題に拡張。併せて特別主題を設定。
- 2) 共通科目を「ディシプリン入門」と位置づけ、専門教育との関わりを明確化。
- 3) 教養ゼミは、「大学生としての基本的な資質を養成する導入教育」という性格を徹底化。
- 4) 「4年一貫教育」の観点から高学年教養科目の設置を早急に検討。

翌18年度より新カリキュラム実施、高学年教養科目設置検討の開始、大学教育開発センターの組織見直しに着手した。

平成19年度には、高学年向け教養科目の開講、特色ある講義群として「瀬戸内研究講義群」の設置の検討を開始した。

平成20年度には、高学年向け教養科目を充実すべく、学部開設科目の中からこれを指定した。また、主題科目「高齢化社会へのアプローチ」では教科書を作成し、「瀬戸内研究講義群」では4科目を開講した。

本年度はカリキュラム上の大きな変更はないが、高学年向け教養科目、「瀬戸内研究講義群」の整備・充実を進めている。後者のうち、「瀬戸内海の浅海環境」では教科書を作成した。ちなみに、本年11月に出された国立大学法人評価委員会の平成20年度業務実績評価結果においては、「瀬戸内研究講義群」が注目される事項として挙げられている。

次に今後の課題であるが、中期的なものとして、現在策定中の本学次期中期目標・中期計画のうち、全学共通教育に特に関連する項目を掲げると以下の通りである。

「教育内容等に関する目標」の「1 学士力を備えた人材を育成する」・中期計画「学士課程教育を通じて21世紀型市民育成のための教養教育及び専門教育を実施する」、中期計画「コミュニケーションスキル・プレゼンテーションスキルを高める科目及びボランティア関係科目等を開講・検証する」。

「教育環境の整備に関する目標」の「1 教育の質の向上のため、ネットワーク環境の整備・充実を図る」・中期計画「分散キャンパス間、他大学間での円滑な単位取得に繋がる履修のため、eラーニングシステムや遠隔授業システムを整備する」。

以上の課題を果たすにあたっては、全学共通科目を担当される教員の方々の協力が不可欠であることはいままでもない。

2. 大学教育開発センターの次年度取り組みについて

武 重 雅 文 (大学教育開発センター長)

現在の大学教育開発センターの取り組みの核となるのは、「21世紀型市民」育成のためのカリキュラム構築プロジェクトと「四国学」関係科目の開設である。これら二つの取り組みについて説明し、そのうえで次年度以降のプロジェクト計画について述べる。

「21世紀型市民」育成のためのカリキュラム構築プロジェクト

大学設置基準の改正とともに、大学の数は増加し、各大学間での競争が激しくなっている。こういった状況下で大学が生き残るためには、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを整備し、魅力ある大学づくりをしていかなければならない。香川大学の全学共通教育では、これまで様々な点から教育の充実化を試みてきたが、明確なポリシーがそこにあったわけではない。そこで大学教育開発センターでは、2008年に出された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」の内容を踏まえつつ、「21世紀型市民をつくる」をポリシーとして掲げることにした。ここで21世紀型市民というのは、メディア・リテラシー、国際的理解力、コミュニケーション力等、21世紀の世界情勢に対応可能な能力を備えた市民のことである。こういった21世紀型市民が持つべき力は「学士力」として項目立てが可能であり、大学教育開発センターはこれを指標とした全学共通教育の再編を行うことを目指している。

昨年度の事業としては、他大学の取り組みに関して、アンケート調査、訪問調査を行い、本事業の今後の課題の析出を行った。今年度は、教養教育の「質保証」のための方策の検討、「学士力」という観点からの全学共通教育現行カリキュラムの点検を行っている。

「四国学」関係科目の開設

このプロジェクトは、戦略的大学連携支援事業で採用された「『四国の知』の集積を基盤とした四国の地域づくり担う人材育成」の一環である。四国の8大学が連携して「四国学」を構築し、全学共通教育の授業に役立つコンテンツの作成を目指している。内容としては、「四国の文芸」、「四国の歴史」、「四国の社会」、「四国の自然」からなる、新特別主題「四国学」が計画されている。来年度前期には授業コンテンツの準備を終え、後期からの実施を目指す。いわば地域文化のリテラシーとしての、教養教育と地域で活躍する職業人育成の役割を担う科目である。

次年度以降の「21世紀型市民」育成のためのプロジェクト計画

大学教育開発センターは、「学士力」を指標とした全学共通教育の再編を目指すとともに、その補完としての「四国学」の確立を目指す。その他の点では、主題科目の再編、高学年向け教養科目の充実による「副専攻」制の開設に向けた取り組み、新設学部（教養学部）との連携体制構築が課題となる。教養学部が開設された場合に、この学部が全学共通科目をすべて引き受けるわけではなく、従来通り全学出動体制が必要になることはいうまでもない。この点で、全学共通科目では、今後とも各学部の教員の方々の協力が必要である。

3. 全学的なFDプログラムについて

葛 城 浩 一 (大学教育開発センター准教授)

現在、雑誌等で大学のランク付けがなされる場合に重要な指標の一つとなるのは、「その大学がどれだけ教育に力を入れているか」である。こうした動向は、大学の設置基準が改訂されるごとにFDの比重が重くなり、現在それが義務化されていること（大学設置基準25条の3）にも表れている。

香川大学における全学規模の取り組みとしては、大学教育開発センターが毎年定期的に行っている新任教員研修会や今回の全学共通教育の平成22年度実施に向けた研修会に加え、FDスキルアップ講座やPD研修会が挙げられる。これらの取り組みを通して、授業の内容および方法の改善に努めている。

こういった全学規模の取り組みは、香川大学がSPODに参加するようになったことで、一層の充実が図られている。SPODとは、「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (Shikoku Professional and Organizational Development Network in Higher Education)」の通称である。これは平成20年度に文部科学省戦略的大学連携支援事業として採択されたプロジェクトで、現在愛媛大学を主幹校として運営されており、四国のすべての大学・短大・高専がこれに参加している。香川大学はSPODにおいてコア校という役割を担っており、香川県におけるFDの中心となっている。そのため現在、香川大学は従来よりも多くのFDスキルアップ講座を開講している。また、これとは別に、他大学で行われている講座の遠隔配信も受信・公開している。現在の香川大学は、授業の内容、方法を改善するための手掛かりが非常に得やすい状況にあると言えるだろう。

しかし残念なことに、本学のスキルアップ講座への参加者、遠隔配信の利用者はまだまだ少ない。そこで教員の方々に利用していただきたいのが、SPODが発行している『研修プログラムガイド』である。この冊子には、四国で行われているスキルアップ講座のスケジュール、対象者、内容、遠隔配信の有無について、詳細に記されている。研修プログラムガイドは、研究交流棟、修学支援グループで入手可能なので、教員の方々は是非この冊子を参考に、スキルアップ講座に参加していただきたい。

[参加者アンケート集計 第1部・全般的課題]

本研修会を受けて参考になったところ、お感じになったところなどをお書きください。

- ・質問できなかったのですが、補講時間決定の際、200名を超える受講者に対して、都合のよい時間を調整するなど、一教員の裁量では無理なのではないでしょうか？
- ・現代の学生気質からすれば、従前の一方通行的講義ではなく、双方向的な面が求められていると感じている。特に100名を超える中で、学生と双方向で行われている講義を知りたい。学生の思考の流れが分からない。学生の基礎的知識不足を実感している。その中で、1コマの中でフィードバックする手法を知りたい。
- ・皆さん、大人数での出席チェックに悩んでいる様子がわかって、同感だと思った。
- ・今年度から本学に赴任したので、基本的な事務手続の方法を初めて聞き参考になった。またFD

の全体的な構想も分かった。

- ・ 大人数において、学生さんにどのような授業を提供すればよいのかということ悩んでいるので、分科会でいろいろヒントをもらえてよかった。
- ・ 全学レベルで共通教育に対する基本姿勢を理解することができ、大変参考になりました。また事務レベルの注意事項をまとめて聞くことも有益でした。
- ・ FDスキルアップ講座をもっと利用すべきかと思いました。
- ・ SPODの概要(事業内容、組織)が分かって参考になった。四国学のGPについても知りたい。(四国学やeラーニング、遠隔講義についての入門知識(講義形式)、実際に教員が利用するための導入(WS)のそれぞれで)
- ・ センターの次年度取組の状況
- ・ 現在、共通教育に求められる事が理解できた。
- ・ 手続等をもう少しメインにさせていただけるとありがたいです。
- ・ 成績評価については、研修内容を深めてはどうでしょうか。
- ・ FD、PDの詳細が聞けたところがよかった。成績評価の基準の標準化が必要だと思いました。
- ・ 大学教育開発センターの方々がいづも適切に判断され、必要なカリキュラムについても検討されていることが分かりました。いづもありがとうございます。
- ・ 現状のどのようところが問題なのか、そしてそれらの問題を、今後どのように解決するための将来計画であるかについて、もう少し分かりやすくご説明いただければありがたい。
- ・ SPODについて、初めて知ることができてよかったです。全学共通教育事務手続も参考になりました。
- ・ 大学は生き残りをかけて競争しなければならない。香大も、それはよしとは思わないけれども、現状では否応なく情勢に従わざるを得ないという認識なのですね。
- ・ 遠隔教育で四国各大学と連携して行われているのに大いに関心を持った。
- ・ 全学共通教育の現状と次年度以降の方向性が少し分かった。
- ・ 武重先生のご説明、大変わかりやすく参考になりました。事務手続についてよくわかりました。
- ・ 参加する方はいづも参加するし、参加しない方はいづも参加しないように感じました。(あくまで主観ですが)。

大学教育開発センターでは、日々の教育活動に直接的に役立つようなFDスキルアップ講座等も実施しています。以下のうちで参加したいと思う講座がございましたら、その番号に三つまで○をつけてください。

シラバスの書き方……………	2	研究室運営方法のコツ……………	2
様々な評価方法……………	4	心理学から見た教室デザイン……………	4
グループ学習のコツ……………	2	パワーポイント基本技・便利技……………	9
大人数講義法の基本……………	10	動画教材作成法……………	6
講義のための話し方入門……………	8	授業双方向性を高めるクリッカー……………	5
レポートの書き方の教え方……………	2	人権啓発研修……………	1

eラーニング入門 …………… 4	FD養成講座 …………… 1
聴覚障害学生に対応した授業方法…… 0	「スキヤンスナップ」で文書整理術 … 2

その他、本研修会や教育FD活動、全学共通教育のあり方、あるいは広く本学の教育に関して望むことなどがございましたら、ご自由にお書きください。

- ・研修会やFDに参加が難しい教員、職員向けに、DVD、ライブによる配信を行うとよいと思う。
- ・「平成22年度に向けた事務手続の方法について」のお知らせで、事務の方から詳細に説明していただき、とてもわかりやすかったです。どうもありがとうございました。
- ・参加できなかった会のビデオをオンラインで見られるようにしていただけるとと思います。
- ・(既に行われているのかも知れませんが) SPODの講義記録(ビデオやDVD等)の貸し出しをしていただけると、教員の空いている時間を使って視聴できるのでよいと思います。さらに、可能ならば、DVD等を複数作成し、各学部に配布してはいかがでしょうか？
- ・大学の質とレベルと学士力を維持することがとても大切です。それと同じくらい入試で入ってくる学生のレベルと質を維持できることも、とても大切です。別個に考えるべきではありません。
- ・学部間での交流(FD参加など)を進めるため、(学部間の)バスなどをぜひ運行して欲しい。
- ・新任教員へのセミナーを4月の早い時期に行って欲しい(夏休みに宿泊形式で行われても授業には反映できないので)。
- ・大学の講義・演習で大学生にどれくらい理解されているか、いつも関心を持っています。どのスタイルがベストなのか、学生さんの実態等から模索しているところです。
- ・FDは授業の悩み、アイデア交流会として意味を持たせるとよいと思った。
- ・本FDにとどまらず突然行事連絡が入り、日程調整に苦慮する。年間計画を調整し、早い段階で明示して意識化すべき。

FD研修会報告 第2部・分科会

A. 大人数講義授業改善分科会

司会：最上英明（大学教育開発センター）、記録：新井明治（調査研究部委員・医学部）

本分科会では本学教員による実践報告（公開授業時のVTRを利用）をもとに議論が行われた。報告されたのは、全学共通科目「政治学A」担当の法学部の堤英敬教員である。議論においては下記のように多様の意見・コメントが聞かれ、大人数の学生の集中力を保ちながら多くの知識を伝えることの難しさを改めて認識させられた。提示された問題の多くは昔から語られてきた「永遠の課題」でもあり、本分科会で解決の糸口が見えたとは言い難い。しかしベテランの先生方が実践されている様々な工夫は、若手教員にとって大変参考になったことは確かであろう。（稿末資料1参照）

(1) スライド（パワーポイント）使用、配布物（プリント）、板書に関連した意見

- ・パワーポイントを使用することで「話し忘れ」がないので重宝している。
- ・パワーポイントを使用していると集中力がもたない学生が目立つようになったため、極力板書するように改めた。パワーポイントを使っても学生が集中できるようにする工夫があったら教えて欲しい。
- ・スライド内容を全て配布すると学生が話を聞かなくなる。今は授業のポイント部分だけをプリントとし、スライドで見せる図表は学生に配布していない。
- ・穴埋め式のプリントを配布したことがあるが、学生は空欄に書き込むだけで満足してしまう傾向がある。
- ・手で書いて覚えることが大切だと考え、積極的に板書を行っている。
- ・以前は板書していたが、学生からパワーポイントを使ってもらえないかとリクエストされた。
- ・ほとんどの教室がホワイトボードになっているが、ボードの反射や字が薄い等により字が見づらいとの苦情が多い。昔ながらの黒板の方が良いのではないか。

(2) 学生の集中力を引き出すための工夫

- ・履修者名簿を見ながら学生を当てて質問したり、学生全体に質問をすることで注意を向かせるようにしている。
- ・途中で「ここはポイントだよ」と注意を促すようにしている。

(3) 出席チェックに関連した意見

- ・履修者名簿の名前を順に読み上げて返事をさせた。出席確認だけで5～10分を要したが、代返する学生がいた。
- ・出席チェックはティーチング・アシスタントにやってもらった。
- ・最終的に伝えたいことが伝わっていれば良いと考えているので、出席はとっていない（自分が所属する学部の専門講義では出席をとらないのが一般的）。
- ・出席カードに名前を書くためにだけやって来て、（授業の雰囲気やをわるくすることで）他の人の迷惑になるような人が増えるのは望ましくないため、出席はとっていない。

- ・教員が工夫して新しい出席チェック法を取り入れても、学生は抜け道を見つけてしまう。
(例1) 学生証を使用する出席確認端末を導入しても、友人から預かった学生証で虚偽の出席申告を行う者がいる。
- (例2) 携帯メールによる出席チェックを行ったが、友人からの情報を得て後からメールを送ってくる者がいた。送信時間が明らかに遅いにもかかわらず「自分は出席していました」と主張する。
- (例3) 授業の途中で用紙を配布し、授業内容のまとめ・感想・質問等を書かせるようにしたところ、出席していないのにレポート（内容はシラバスからの転記）を提出する学生がいた。
- ・(出席の虚偽申告について) 単位さえ取ればよいという学生が多く、不正行為に罪悪感を感じていないことに危機感を抱いている。

(4) 評価に関連した意見

- ・試験（中間・期末）ではできるだけ授業内容全般にわたる理解を確認するような問題作成を心がけている。
- ・知識を詰め込むよりもミニレポートを併用する方が良かったかもしれないと悩むことがある。
- ・感想文や小テストなど、文章を直接書かせるタイプの課題を実施したところ、カンニングが少なく学生の理解度もよくわかったが、大人数の文章をチェックするためには手間と時間がかかり過ぎる。

[主題科目分科会・参加者アンケート結果]

大人数講義の授業実践で苦労なさっている点を具体的に二つあげてください。(来年度初めて担当される先生は、一般に大人数の講義についてのご苦労をお書きください。)

- ・学生の取り組む姿勢の違い。
- ・レポート等を課す回数。
- ・学生との対話。
- ・やる気のない学生への対応。
- ・出欠の確認。
- ・マーカーによる板書への不満。
- ・意欲のある学生と意欲のない学生の差が激しく対応しにくい。
- ・出席確認等も含め学生からの反応を見るのが難しい。
- ・一方的な授業になってしまいがちなのだが、学生とどう交流するべきか。
- ・評価をテストにすべきかレポートにすべきか。個人的には大学生なのでレポートで自分が調べてきたことで評価したいと思うのだが、やはり知識を問う形のテストをした方が公平な評価がしやすいのは事実。
- ・授業後の質問時間が取れない。
- ・大人数授業は初めてで何もかもが不安に思っています。パワーポイントの用意の仕方、出欠の取り方。

- ・常に関心を引き付け、集中力を持って受講して貰うようにする点。
- ・レポート（3回程度）を課した年もあったが200名を超える受講生の採点は大変だった。その後、期末テスト試験1本勝負にした年もあり、採点は楽になったのだが、ちゃんと理解度を評価できたのだろうかと思う。
- ・学生の発言の音が小さいのであてにくい。
- ・学生—教員間の距離が遠いように思われる。
- ・質問がなかなか出にくい。
- ・教えるべきことを伝えるためにはスライドを多用せざるを得ず、早口で話すために学生の注意力を保てない。
- ・どのように学生の興味を持続させるか？
- ・成績評価をいかに効率よくするか？

大人数講義の授業実践で特に工夫・留意なさっている点を具体的に二つあげてください。(来年度初めて担当される先生は、一般に大人数の講義についての工夫をお書きください。)

- ・出欠の確認に従来は点呼でしていたが、本年よりミニレポートの配布、回収に変更した。しかし欠席者のミニレポートを出席の友人が提出している節が見られた。
- ・レスポンスをできる限り取り、それについてはなるべく答える。
- ・バランス（テストと小レポート/一方的講義中心に学生のやりとりをどの程度まぜていくか）
- ・私の専門とはちがう学部の学生にも、とっつきやすいように親しみやすい素材を使うようにしている。
- ・話す量を減らす。
- ・より一般的なレベルの授業にする。
- ・映像・画像の用意をしっかりとっています。
- ・「環境」をテーマにした主題科目を担当していたときには、皆が興味を持っているであろう身近な水利用・喝水の問題について扱い、なるべく能動的に参加してもらえるように工夫した。（でも受講生からは「自分で勝手に面白がってしゃべっているだけ」などの個別意見もあった・・・）
- ・参加させるためにランダムにあてるようにしている。
- ・出席カードなどを通じて学生の質問やコメントを聞く。
- ・どこからでも見えるように黒板の字はなるべく大きく書く。
- ・パワーポイントのスライドを縮小印刷して配布。大事なことは「ここは大事だよ」と伝えている。
- ・ケイタイ電話を用いた小テストで成績評価をしているがカンニング等で問題を感じている。

本日の分科会で参考になった点やお感じになったことをご自由にお書きください。

- ・授業のビデオについて受講生全体の様子を様々な角度から撮って見せてほしい。
- ・大人数授業での授業例を示してほしい。
- ・きちんと論点を整理して議論をしてほしい。

- ・この人数（今日の出席者数）であればもう少し狭い部屋で口の字になって意見交換できれば良かったかなと思います。
- ・出席の取り方。
- ・出席の取り方について少し参考になりました。
- ・「一方通行」の講義ではなく、話に“間合い”をとったりして授業中に立ち止まって考えたり、内容を確認できるような工夫が大切だと感じた。
- ・テキストの効果的な利用の仕方、テキストの補充、解説の方法は重要な教授法だと思った。テキストを巧く解説できれば、受講生の理解度、充実度も高まると思われた。
- ・他の先生の授業風景を知ることができてよかったです。
- ・他の先生方の諸々の工夫の一端を知ることができて参考になりました。
- ・新聞の記事などなるべく実例をあげられる点
- ・色々な先生の苦勞されている様子がわかって参考になりました。
- ・もう少し大人数講義の改善について報告して欲しかった。

B. 少人数講義授業改善分科会

司会：吉田秀典（調査研究部委員・工学部）、書記：倉石文雄（調査研究部委員・教育学部）

瀬戸教員は「教育という名の病癩?からだ、おと、ことば」というテーマで、ワークショップやディスカッションを中心にした授業をおこなってきた。今回の瀬戸教員の実践報告もそれに則したもので、平成21年5月15日の授業実践「音が回る世界の体感」と銘打たれた授業をビデオで流すことから始まった。

学生は「ぶんぶんゼミ」と名付けられた音の出るおもちゃと「ハーモニックチューブ」と名付けられた音具を、とにかくならず事を指示される。学生は、思い思いに音具を鳴らしては、自分が出す音と他の学生が出す音の音場の中で、各自が次第に授業の主役になっている自分を感じていく。刻々と学生の意欲関心が変化し、それが音色の変化、音を鳴らす場所の変化、集団構成の数の変化など様々に変化していく様子が見て取れた。

この時期の新入学生達が、自発的に動いたり、意欲的にグループを組んだり、グループで人の入れ替えが起こったりする事には驚かされた。

「教養教育」とは、基本的な知的態度と知的技法の習得、多様性を理解し受け入れる素地の育成、と特徴付けられてきた。ところがこれまでの一般教養科目の講義は、大人数、大講義室での大量生産的教育に陥りがちであり、受験勉強、詰め込み教育にうんざりしている学生に、論理的思考力、自発性や独創性等を喚起させる学習形態としては、今ひとつ魅力にかけるものであり、新入生の学習意欲を低下させてきたとの批判があった。そこで上記のような問題に対処すべく考えられたのが、教養ゼミナールである。この授業形式は、「少人数の学生が共同で研究学習するゼミナール形式の授業」であり、これまで指摘されてきた一般教養のマスプロ的な授業形態の弱点を補うものとして位置付けられてきた。少人数での、教員、学生間の交流から発表、討議を通じて論理的思考力、批判力、表現力を養い、高校生から大学生への脱皮を促す狙いもあった。そういう視点から見ると、瀬戸教員の授業

実践報告は、大変趣旨にかなったものであり、興味深いものであった。

発表後の質疑応答も活発におこなわれ、各自の体験などを元にして、活発な意見交換がされ、制限時間一杯まで話し合いが続いた。大学の授業がすべてこのような授業になる事には異論があるが、興味深くためになる授業実践報告であった。(稿末資料2参照)

[少人数講義授業改善分科会・参加者アンケート結果]

ゼミの計画や運営で、特に工夫・留意なさっている点を具体的に二つあげてください。(来年度初めて教養ゼミナールを担当される先生及び教養ゼミナールを担当されない先生は、一般に少人数の講義についてのご苦勞をお書きください。)

- ・受講生の数が少ないぶん、積極的に授業に参加する学生が(1人でも)いれば全体もそれに引っ張られるように盛り上がる反面、しらけた気分の学生が(1人でも)いるとやはりその空気に流される傾向があるように思います。後者の場合、どうやって盛り上げるか試行錯誤しています。
- ・少人数なのでシラバス通りにできないこともあるが、それが評価となって出てくることには疑問を感じる。
- ・人間関係が濃くなることに対しての不安もある。
- ・専門の講義において実験を担当しているが、学生が10人程度の規模でそのようなケースでは学生への質問を増やす。また実験という性質上、学生自ら実験して貰うが極力「教員が見せる」のではなく「学生にやらせる」ことにしている。
- ・「ビデオやDVD」で視聴し「本や文献」で読みあうだけでなく、四国八十八ヶ所のうちの数ヶ所を学生といっしょに巡礼している。学生の意見を聞くと、もっと多くの寺院を巡りたいという声もあるのでもう少し多くの寺院を学生とともに歩いて、悟りの境地に近づきたいと思う。
- ・学生の授業観と授業への姿勢を相対化させその先へ開くこと。
- ・50～100名くらいの人数の授業を担当することが多いので、25名という人数はうらやましい限りです。

本日の分科会の実践報告で、有益だと思われた点や印象に残った点をお書きください。

- ・「授業の向こう側へ出る」というお話が印象的でした。方向転換したシラバスを配布するというのも新鮮でした。
- ・やはり少人数の教養科目は必要であるという感じは持った。
- ・「学生に勉学を提供する」というスタンスは興味深かった。また、学生の自発性に期待するというスタンスにも興味を抱いた。可能である限り少人数教育を施したいと考えるが、効率性や教育の空きを考えると、現実的には難しい面も多い。
- ・少人数の授業では長所や短所も多くあるので、できるだけ有益なものにしようと考えている。
- ・少人数なので人間関係とも深くかかわってくると思う。そこでグループを作って、グループごとにリーダーなどの役職を決めて、うまく授業を展開させていこうと私は思う。

- ・少人数授業のそれぞれの先生方の工夫や苦心策そして姿勢の微妙な配慮をうかがうことができた。

質疑応答でふれることのできなかった疑問点、あるいは、教養ゼミに関連して大教センターへの要望などがございましたらお書きください。

- ・今回ビデオで見せていただいたワークショップは、その後ディスカッションもされているのでしょうか？（レジュメ2ページ）どのようにディスカッションをされるのか伺いたいなと思いました。
- ・シラバス通りの講義は少人数教育においては難しい面もある。授業評価においては「通り」よりも「概ね」位の表現が良いのでは。
- ・学生の質が低下しました、やや障害のある者も居ることから少人数教育は、今後重要性を増すのでは？
- ・「四国八十八ヶ所」のビデオテープについておたずねします。香川大学の図書館に置かれている「四国八十八ヶ所の寺院の巡礼」のビデオテープは古くなっており、テープが切れそうになっています。新しいDVDやビデオテープに買い替えてほしいと思います。よろしく願いいたします。
- ・少人数授業と大人数授業の授業評価アンケートの内容を改善すべきです。
- ・少人数の教養ゼミのコマ数をもっと増やして欲しいと思います。それが、大学の生き残り策としても有効ではないでしょうか。（大人数の授業はどうかんばっても、NHKの放送に勝てないと思います。）

C. 成績評価の厳格化・標準化分科会

司会：佐藤慶太（大学教育開発センター）、記録：羽白洋（大学教育開発センター）

「成績評価の厳格化・標準化」が1998年大学審答申や2008年中教審答申で強調され、香川大学の中期計画にも登場してきたという昨今の事情があり、今回独立した分科会として初めて実施された。当初参加予定の英語教員が別用で全員欠席したため、理科系教員数名という小人数であったが、かえって活発な意見交換が行われた。まず佐藤先生作成の資料をもとに、一般的「厳格化」「標準化」の定義・GPA制度・問題点などの説明・提示があった。続いて参加者が、成績評価に関して抱えている問題・苦勞している点などの経験を各人披露し、全員共有の認識とした。共通教育に限らず学部レベルのものも紹介され、活発な質疑応答が続いた。その結果、参加者全員が新鮮な刺激を受け、理想的な、そして学生にとって公平な成績評価とは何かを真摯に考える分科会となった。

なお、詳細については、前稿の『全学共通科目における成績評価の現状と課題』を参照。

D. 今後のFDのあり方を考える分科会

司会：葛城浩一（大学教育開発センター）、記録：深田和宏（調査研究部委員・農学部）

本分科会は、各学部及び大学教育開発センターで取り組まれているFD活動の現状や問題点について互いに共有し、今後の活動に役立てていくことを目的として設定されたものである。そのため、各部局でFD活動の計画立案や実施に直接かかわる立場の教員間での意見交流が主な内容であった。

事前に以下の項目についてのアンケートを行ったので、その回答に基づいて各部局におけるFD活動の状況説明がなされ、その後、意見交流をした。

- FDの主な実施組織
- 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況）
- 授業公開の実施状況
- 学生による授業評価アンケートの活用法
- カリキュラム評価アンケートの活用法
- FDによる効果
- 問題点・課題

部局により取り組み状況や評価アンケートの活用法は様々であったが、どの部局でもFDの実施体制が確立されており、計画的に取り組まれている状況が把握できた。

全体的に共通する問題点・課題としては、FD活動に積極的に参加する教員層が限られている（参加者の人数を増やす工夫、受け身的な参加からの脱却が必要）、授業公開等の企画内容のマンネリ化、あるいはFD活動による効果が十分に検証できていないこと等が挙げられる。今後は、これらの課題を解決していくことが求められる。

なお、詳細については、前稿の『香川大学のFD活動の実施状況』を参照。

政治学 A 現代日本の政治

4 国会

<ねらい>

国会は政治的な決定に影響力をもっていると言えるだろうか？また、何が影響力の源となっているのであろうか？

<キーワード>

議院内閣制、与党、野党、議員提出法案、内閣提出法案、牛歩戦術、強行採決、国対政治

1 ねじれ国会の功罪

参議院の意向を反映／衆議院の意向が頓挫

- 例) ガソリン税暫定税率の廃止→復活
- テロ特措法→新テロ特措法

2008年通常国会に提出された主な法案のパターン（朝日新聞2008年6月19日）

【ガチンコ対決型】

衆院3分の2の再可決で成立＝6法

改正所得税法▽改正地方税法▽公債特例法▽地方法人特別税暫定措置法▽改正地方交付税法▽改正道路整備財源特例法

【協調・修正型（1）】

与野党合意で議員立法＝17法

国民生活混乱回避租税特別措置法▽同地方税法▽宇宙基本法▽改正石綿健康被害救済法▽改正被爆者援護法▽ハンセン病問題基本法▽改正地震防災対策特別措置法▽オウム真理教犯罪被害者救済法▽青少年有害サイト規制法▽改正性同一性障害特例法など

【協調・修正型（2）】

政府提出法案を与野党で修正＝13法

国家公務員制度改革基本法▽改正少年法など

弱い参議院？強い参議院？

	衆議院	参議院
定数	480	242
任期	4年(解散あり)	6年(解散なし)
衆議院の優越	法案の議決(59条) 予算の先議・議決(60条) 条約の承認(61条) 首相の指名(67条)	

「第二院は第一院に同意するなら不要だし、一致しなければ有害である」(シェイエス)

2 議院内閣制における議会

議院内閣制における議会

議院内閣制＝内閣の存立が議会の信任を基盤とする制度

→内閣提出法案は与党の支持を得て成立

→野党の議員が提出した法案は与党の反対により否決 が基本

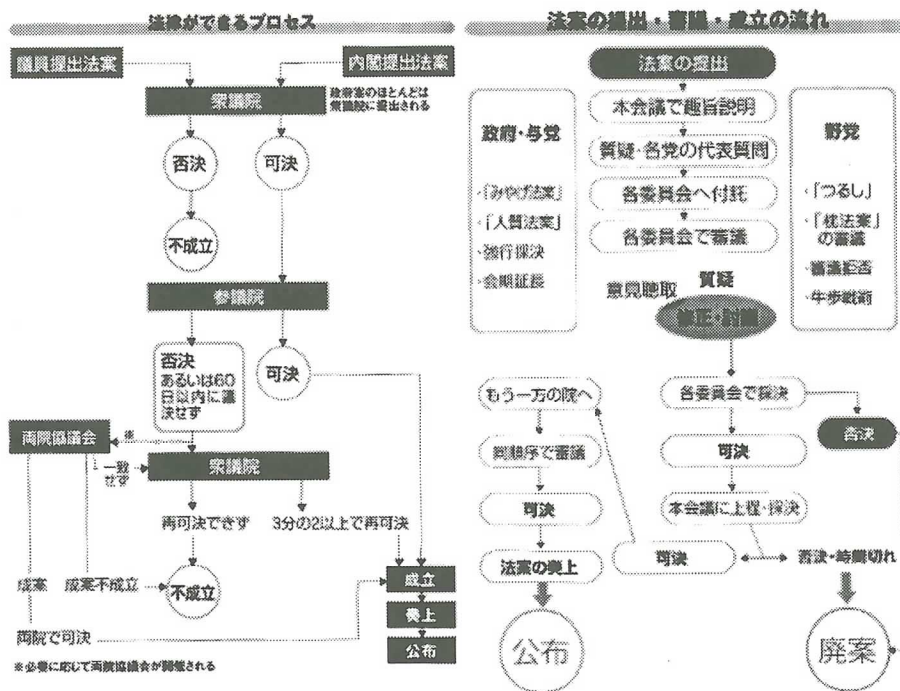
⇒野党が内閣提出法案を成立させないためには、審議しないしかない

日本における野党の国会での影響力

伝統的な国会観：ラバースタンプ論

内閣提出法案はイギリスよりも高い (テキスト 126～127 頁)

消費税導入の過程 (テキスト 128 頁)



福岡政行監修『わかる 政治のしくみ』ダイヤモンド社、2001年、51、53頁

3 国会の影響力の源泉

日本において野党は、どのようにして影響力を行使するか？

①制度的な影響力：政府・与党案を否決、野党案を可決＝ねじれ国会

※ 例外的 (例外として郵政民営化法案の参院での否決)

②政府・与党案を「採決させない」

物理的な抵抗＝「時間引き延ばし戦術」

牛歩戦術（例：PKO 協力法案 1992）

座り込み（例：住専への公的資金投入 1996）

ある意味で効果的な手法／日本独自の方法？

なぜ「時間引き延ばし戦術」は有効なのか？

①時間的制約

会期の長さ（150日：通常国会の場合。その他、臨時国会が開催される）

会期不継続の原則

二院制

議事運営における全会一致の原則

②国民の支持

与党の対抗策：強行採決

→野党の強い反発／世論からの批判

…あくまでも最終的な手段

朝日新聞 2007年06月02日

（社説）安倍首相 少し頭を冷やしては

内閣支持率の急落。そして松岡農水相の自殺。そんななかで来月には、参院選挙という政治決戦が迫る。安倍首相は焦りを募らせているようだ。

あと3週間ほどの国会で一つでも多くの法案を通し、有権者に目に見える成果をアピールしたい。その気持ちは分からないではないが、このところの強引さは度を超している。

「宙に浮いた年金」を救済するための特例法案を急ごしらえて国会に出し、未明の衆院本会議で押し切ったかと思えば、夜が明けた同じ日に国家公務員の天下りをめぐる公務員制度改革関連法案を衆院で可決させるよう、与党に号令をかけた。

天下り規制では、民主党も対案を出して審議の続行を求めている。採決強行に踏み切れば、国会の大混乱は避けられなかった。さすがに河野洋平衆院議長が「連日の強行採決は国民から見えていかなものか」と与党をさとし、きのうの採決は見送られた。

宙に浮いたり、消えたりしてしまった年金記録をどう救済するか。官製談合の元凶である天下りをどう改めるか。どちらも国民の暮らしや税金の使い方に絡む重要な課題である。一日も早く対策を講じる必要があるのは確かだ。

だが、郵政民営化総選挙で得た巨大議席の数の力にまかせて、ブルドーザーのように野党をなぎ倒しにして突き進んでいいわけではない。苦言を呈した河野議長の判断は当然のことだろう。

自殺した松岡氏が受注企業などから多額の献金を受けていた緑資源機構の官製談合事件は、役人らの天下りと引き換えに税金の使途をゆがめる「談合社会」の根深さを改めて見せつけた。

政府の新人材バンク構想は、そもそも天下りを続けることを前提にしたものだ。それで談合社会の根を断るとはとても思えない。あつせんを一元化しても、役所の予算や許認可と引き換えに民間が再就職を受け入れる、天下りの構図は変わりそうもないからだ。

公務員の再就職と役所の権限とが絡む構造をどう断ち切るか。公務員の意欲をそがないような人事制度も含め、幅広く対策を考えねばならない。目先の選挙への思惑から拙速で基本的な制度をいじられては困る。

年金の問題も同じだ。先月末、社会保険庁改革法案の採決を衆院の委員会で強行した直後、朝日、毎日、日経3紙がそれぞれ行った世論調査で、内閣支持率がそろって過去最低を記録した。そうした拙速ぶりに対する批判の表れだろう。

新入材バンクの法案は来週、衆院を通過する見込みだが、参院で十分に議論する時間はなさそうだ。年金特例法案や社保庁改革法案にしても、駆け足の審議にならざるを得ない。

首相は頭を冷やす必要がある。終盤国会ではもっと丁寧な姿勢で課題に取り組むべきだ。

⇒国対政治

与党と野党の代表者が、国会対策委員会（非公式の委員会）で協議。取引と妥協。

4 1990年代以降の立法過程

内閣提出法案の成立率の上昇

野党の戦術

民主党（当時）の「対案戦術」：議員提出法案の増加

審議引き延ばし戦術の継続

国会制度の改革（国会活性化法）

クエスチョン・タイム導入

政府委員制度の廃止

アリーナ型の議会へ？

変換型議会（アメリカ議会）

法案を作成・修正していく能力を持つ議会

＝個々の議員、政党が立法に重要な役割を担う

アリーナ型議会（イギリス議会）

与野党が主張を戦わせる議会。法案自体は与党が提出したものが可決される。

＝内閣・与党が立法で重要な役割を担う

参考文献

久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝『政治学』有斐閣、2003年、10章
大山礼子『国会学入門（第2版）』三省堂、2003年

シラバス

授業科目名 政治学 A Politics A	科目区分	授業コード
	共通科目	020301
講義題目 現代日本の政治	単位数	時間割
	2	後火2
教員名 堤 英敬 (法学部)	対象年次及び学科	
	1~2年 全学部	
	関連授業科目	
	履修推奨科目	
授業の概要 この授業では今日の日本政治を題材としながら、政治学の基本的な考え方について講義していきます。今日の日本政治は、政治や行政、地方と国の関係などの制度的な改革が進み、かつての自民党一党優位制は自民党と民主党の二大政党制に近いシステムへの移行するとともに、小さな政府という考え方が広がり、政府の活動自体が議論の対象となっています。政治学は、社会における公的な決定にまつわる仕組みや、それに関わる人や組織の行動、さらには望ましい決定のあり方を対象とする学問ですが、この授業では政治学の考えに基づいて今日の日本政治を理解できるようになることを目指します。		
授業の目的・達成目標 ①政治学の基本的な概念や考え方を説明できる。 ②政治学の概念や考えに基づいて現実の政治現象を理解できる。		
授業及び学習の方法 配付資料に基づきながら、講義形式で授業を行います。毎回の授業で示すキーワードが自分なりに説明できるように自学自習を勧めてください。また、常日頃から新聞やテレビ、インターネットなどで報じられる政治ニュースに関心を払ってもらいたいと思います。		
成績評価の方法と基準 達成目標①を評価する中間試験（30点）と期末試験（40点）、達成目標②を評価するレポート（30点）によって成績評定を行います。		
授業計画 (1) ガイダンス (2) 小さな政府論 (3) 市場の失敗と政府の失敗 (4) 国会 (5) 首相と内閣 (6) 中央・地方関係 (7) 政党 (8) 中間試験 (9) 官僚組織 (10) 利益集団 (11) 選挙と政治 (12) マスメディアと政治 (13) 外交政策① (14) 外交政策② (15) まとめ		
教科書 北山俊哉・真淵 勝・久米郁夫『はじめて出会う政治学：フリーライダーを超えて（新版）』有斐閣アルマ、2002年（1,800円＋税）		
参考書 久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝『政治学』有斐閣、2003年（3,400円＋税） 久米郁男・田中愛治・河野勝『（新訂）現代日本の政治』放送大学教育振興会、2007年（2,200円＋税）		
オフィスアワー 月曜10:00～11:00、水曜13:30～14:30		

「理論と実践の臨界の場にかれるということ一引き続き、初年度教育として教養ゼミナールに何を託すのかを問う」

瀬戸郁子 (教育学部・音楽科教育)

1. 承前

去年度に引き続きこの研修会で報告させていただくことになったが、「授業づくりのお役に立てば」なんていうのはさらさらおこがましく、こんな手練手管を駆使しながら私自身の「開かれ」を楽しんでもいるという類の報告であるのを正直恐縮に思う。現在の18・9歳の人たちの体質をどのように捉えるかは授業者によって多様であろうが私はこのように見る。自ら考えないし感じないし関わらない、「指示待ちくれない族」はもはや言うに及ばず、「空気を読む」という評価がオブセッションとなってしまうと、いかに限りなく「透明人間」に変身するか、「かおなし」になり切るか。それは、ちょっとでも目立とうものなら何時いじめの餌食にされるか分からない。しかもそのいじめの源発が限りなく匿名であるという、そんな空恐ろしい(?) 学校世間を渡ってきた生き残りの処世術なのだろう。

だから「正しく確実に目的を達成するマニュアルをさっさと指示しろ」と学生達の身体は私にせがむ。すぐにそうしない授業者には、他者と関わらないことを手前勝手に美化した履き違えの「踏み絵」をそおっと差し出しておいて、そうとは知らずに授業者が踏むようなことがあれば即刻断罪する。(しかも現行の授業評価はこの体質を正統化しているのだから組織ぐるみの仕業なのだ。) そしてこの安全地帯に留まっている限り到底学びなんぞは起こり得ない。今日は昨日と変わりなく、明日もまた今日のコピーであるとして通過していく。マニュアルを縫い合わせたパッチワークそのものを生きられた日常と寸分違わないものと見る。

「結果を出す」「頑張っている人は偉い」「ガンバリマン」等々をもてはやす世相は慢性化した近代学校教育の発想の末期症状であろう。「現代人は、とかく目的がないと生きて行けないといい、目的を持つことが美德のように思われている」(白洲正子、1996)。近代教育の発想をずらすには人間存在から教育を語り直すしか残っていない。世界に開かれようとするのが人間存在であるならばこそ、特に初年度教育としての授業は理論と実践が分岐する直前の場、専門的に固有な手続きが施される前の、言い換えれば近代主義の目的論的で分析的反省的な視線が動き出す手前で捕らえてしまう臨界の場にかれる身体感覚に触れて生きられる現場であることを獲り返し続けなくてはならないのではないかと考える。できているか否かや、指導は効果を上げているかどうか、集中しているかどうかや、正しいか否か、楽しいかつまらないかや、真剣かふざけているか等々、合目的にして即物的な反省的視線から虚心になって目を凝らして見れば浮かび上がってくる、生きられている身体の拡張としての意味生成の現場に深く眼差して、折り返し照り返されることである。もっと言えば、何の特別でも不思議でもないものを新しく不思議なものとして驚ける、存

在という新鮮な奇蹟の感受に至高しようとするものである。

私は「教育という名の病癖—からだ・おと・ことば」というタイトルでワークショップとディスカッションを中心にした授業を行っている。去年度は「エア—縄跳び」の授業実践例を報告した。こうしてやろうああしてやろうという指導的な野心から平気になって、肯定でもなく否定でもないそのままを受け取る信頼の水底で捲き込み捲き込まれる「今ここの」生成を紹介した。それは、求心的な営みとして纏められるのが宿命とされがちな授業から放たれて、授業の向こう側へ出ようとする私のもがきでもある。授業が「弾ける」身体感覚、あるいは内側から引っ張り出されて開かれて「在る」感触に覚醒する身体感覚の洗浄のごとき体験が眼目である。それはまた、私自身が自分の開かれを賭けて、学生の開かれを引き受け送り出す身体感覚のタグマッチであった。

2. 授業実践事例から

今回、ビデオで見ていただいたのは今年度前期で行った「音が回る世界の体験」と名づけたワークショップ（平成21年5月15日）での事例である。受講生は25名。この単元は2時間扱いの計画。1時間目は、振り回すというしぐさによって音源が拡散することによりどこからともなく響く音に包まれるという体験のワークショップ。2時間目は虫笛づくり。このビデオは1時間目である。「ぶんぶんぜみ」と名づけられたおもちゃと「ハーモニックチューブ」と名づけられた音具を鳴らしてみる。運よく3階から412教室へ変更できたためあちこちで振り回して聴き比べることが可能になった。ここでとり上げて叙述するのは、教室内で「せみ」を鳴らし、それからチューブを持って中庭へ出た。そこからの場面展開である。

チューブを振り回し、回る音が広がっていくのに浸る感覚を全身で味わいたくて中庭へ出た。中庭と授業という組み合わせが新鮮だったのか、あるいは「せみ」の音に興味をそそられたのか、学生達のテンションが変わり始めるのを感じた。415教室のテラスで回し始めた時、数人の女子学生が随時教室へ「せみ」を取りに急いで戻って行った。内心ドキッとした。彼女達の身ごなしに衝動的な勢いがある、あまりに自然だったこと。（へえっ、そんなリアクションするんや！、と。）これは場の流れと雰囲気と自分の気持ちに自然に反応した証しだし、何よりも出来事の当事者になっているという表れだと読んだ。場の状況に乗っているからこそ生まれた「～したい」という自分の気持ちを周囲の目にたじろぐことなくストレートに行動に出すなんてことは授業で今の学生にはめったに起こることではない。これまでの学校教育で「～すべき」「ねばならない」というべき論を行動習性として叩き込まれてきている。だから関わるのがめんどい、うざい、だから関わらない、関われないという若者が出来上がってしまったとも言える。「私も振り回したい」という欲求が生まれてすぐ行動に出た。気がつけばもうそうしてしまっていた、というのが本当だ。

そしてまた、このいきさつを振り返ってみると、教室環境と授業内容のグッド・マッチ

が功を奏していることに気づかされる。それまであてがわれていた3階の教室でやっていたのだが変更届を出した。412教室が空いている。100人以上収容でだだっ広く、机と椅子が固定されているのには大難があるがそれには眼をつぶり、中庭と地続きである環境を変更の優先条件とした。すぐに野口さんが手配してくれた。ラッキーと思うと同時にありがたかった。階段を昇り降りするんじゃなくて、外と地続きであるという教室環境。これは大きい。階段の昇降があれば、わざわざ感があるからめんどくさいし、その上目立ってしまう。しかも教室まで時間がかかる。何よりも「今すぐここで」鳴らしたいという欲動の鮮度が落ちてしまう。気持ちが萎えることから派生する、一見微かな揺らぎが伝播して大きな引き金となり、それが授業のゆくえを左右するいわば補色関係のような分かれ道となることの深さに新ためて気づいたりした。

こうしてエピソードは未だ連鎖して展開していった。「開かれ」の生成はささやかながら続いた。415教室のテラスから4号館の3階のテラスへと移動してみることになった。H君が「3階でやってみよう」と415教室のテラスから提案したのだ。遊び心からなのかもしれないがそれがいい。させられている感覚ではなく、「どうかな?、やってみよう」と試行錯誤する気持ちの発芽だと受け取りたい。下に居た学生で「せみ」だけでなく、ケイタイを取りに戻る人もいた。写メを撮り始めた。そしてこの時間の最後には、「これ(ぶんぶんぜみ)、買いに行く」と一人の学生が告げに来た。私は「見せてよ」と返事して、開かれの身体感覚が授業時間の外にも広がっていく可能性が生まれるかもしれないという苦し紛れの一抔の期待を持った。

3. まとめようもないまとめ

この実践報告は私自身の開かれを賭けたもがきの一綴りであり、それが学生の開かれの媒溶体となるようにと場に出たり入ったりする現象的な身体感覚の実況中継のようなものに過ぎない。これがどなたかの授業づくりの手立ての参考として何かのお役に立つのかどうかは皆目おぼつかない。それでも押さえておきたいことは、ある。彼ら、彼女らは感じていないことはない。いや何となく知っているに違いない。自分という存在は他者との関係性の中に取り結ばれるものだというのを。しかしその認識は微妙に変容しながらも持続してやがて「信頼」と呼べるものの支えとなって生きられるものであるのに、その認識が生きて培われる前に、「空気を読む」というその場しのぎのテクニックを行使してしまう。いや限りなく匿名な何ものかにそうさせられてしまうのだ。これが今の若者の生きにくさの原因の一つと言えるだろう。そうであればますます、教えるということは他でもない、教えられなさや仲良く悩ましく取っ組み合うことであって、その教えられなさを深淵に深く眼差しして授業の非決定性に無限の開かれを託すと腹をくくったからには、非決定的な授業に揺曳する不安定さを、手を変え品を変えていかにしなやかにしたたかにめげず楽しむか、なのではないか。